

阿嘉島の蝶 part11

上林 利寛
A M S L 調理担当

タテハモドキの"散卵"

Butterflies in Akajima Island, Part 11
Scattered egg-laying by the peacock pansy, *Precis almana* (Linnaeus)

T. Kamibayashi

タテハモドキ(タテハチョウ科)。名前は「モドキ」ですが、れっきとしたタテハチョウの一種です。近年、国内での生息域が琉球列島～九州南部(宮崎、鹿児島県の沿岸地域)からさらに北上し、今日では熊本県の宇土半島、天草諸島、八代平野などの沿岸地域に土着したと考えられています。(40年ほど前までは九州南部でも一時的に観察できる迷蝶だったそうです)。この様に熱帯・亜熱帯性の南方系の蝶が北上し生息域を広げることは昨今の地球温暖化と何か関係があるのかもかもしれません。

本種は阿嘉島でほぼ周年、日当たりの良い畑や草原、荒地などで観察できます。又、花を訪れることも多くタチアワユキセンダングサや畑のニンジンの花などで蜜を吸っています。(写真1)とは言っても、縄張り意識が強くほとんど単体で行動するので注意深く探さなければ見つかりません。阿嘉島での幼虫の食草は主にイワダレソウ(クマツヅラ科)です。たまたま、2002年5月18日午後2時頃、本種の産卵行動を目撃したのですが、多くの蝶のそれとは違って、直接食草に卵を産みつけることはありませんでした。では、どこに卵を産みつけたのでしょうか?それはイワダレソウと混在していたイネ科(ハイキビと思われる)の植物でした。(写真2)この様な産

卵行動はタテハモドキにとっては普通で、食草の周りに所構わず"散卵"し、時には石や切り株に産みつけることもあるそうです。

研究所に持ち帰った3個の卵は産卵から4日後の早朝全て孵化しましたが、その幼虫は全長が2mmにも満たない小さなものでした。この小さな幼虫が食草のイワダレソウに辿り着くには長い道のりが待っています。クモなどの外敵に襲われる危険も多くなるでしょう。実は、産卵直前の雌のタテハモドキはお腹の中に1000個以上の卵を持っていてシロオビアゲハの約4～5倍の量はあるそうです。やや雑駁に思われるこの産卵行動ですが、沢山の卵をいろいろな場所に産むことで、幼虫の生き残りの機会を増やそうとしているのでしょうか。飼育の結果は、卵期約4日間 幼虫期19～20日間 蛹期8～9日間 成虫(3匹ともに夏型の個体、性別は不明)でした。

天草地方では本種が普通に見られる様になってから同じタテハチョウ科の在来種、キタテハがほとんど見られなくなったそうです。幼虫時の食草の異なる2種ですが、生息場所がほとんど同じなので、キタテハの方が何処かに追いやられてしまったのかもかもしれません。



写真1. ニンジンの花を訪れる秋型の個体(性別不明)。翅の形、紋様には季節変異があり、夏型と秋型の2つのタイプが存在する。詳細は「阿嘉島の蝶 Part 4」に記載。



写真2. ハイキビ?(イネ科)の茎に産みつけられた2つの卵。直径0.69mm、この小さな卵をフィールドで無作為に探し出すのはとても困難です。

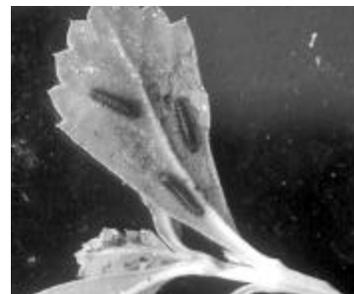


写真3. イワダレソウ(クマツヅラ科)を食べて成育する孵化から5日目の3匹の幼虫。